文化財だより

第 29 号

平成29年３月

発行　真鶴町教育委員会

特集　真鶴に伝わる伝承・民話 ～後世に語り継ぐ～（三）

私たちの郷土には先人から受け継いだ歴史があります。

同時に、古代から現代に至るまで、この地で生活した先人たちの大いなる文化遺産が、有形、無形を問わず様々な文化財資源として存在しています。

しかし残念ながら、時間が経過するとともに、これらの文化遺産には滅失、あるいは散逸などが心配されます。

この文化財だよりは、毎年発行し、そうした文化遺産を後世に語り継ぐとともに、その重要性をお伝えすべく、随時紹介してまいりました。

また、文化財だよりの発行より前には、町民による「郷土の歴史を学ぶ会」の結成をきっかけとして、歴史の流れと先人の足跡を探求して、その成果を「真鶴」という機関誌に発表されてきました。

今回の文化財だよりでは、一昨年度、昨年度、焦点を当てて特集した【伝承・民話】を引き続き取り上げてまいります。

特に消えつつある真鶴のわらべ唄を再録いたしました。

ここに、「真鶴を知る会」において長きにわたりご活躍、ご尽力いただきました会員の皆さまへ深く感謝申し上げるとともに、今回発行しました『文化財だより』が町民の皆さまに活用され、真鶴に生きる人々へ語り継がれますことを祈念しまして本号発行の挨拶とさせていただきます。

真鶴町教育委員会

目　次

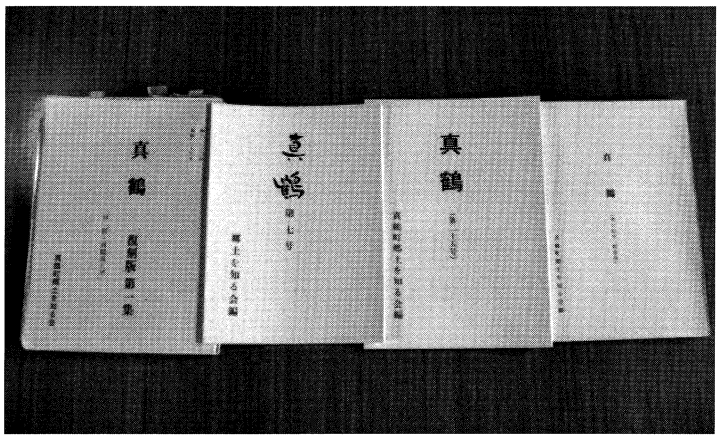
特集
真鶴に伝わる伝承・民話
～後世に語り継ぐ～（三）
「郷土「真鶴」のわらべ唄」……2
「「真鶴」のわらべ唄」……3
「古き真鶴の手まり唄」……6
平成二十八年度文化財保護事業……8

「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関紙『真鶴』の記事の一部を掲載しております。

また全文ではなく、一部を割愛、まとめるなどして再録いたしました。

また、文章は小学生にも読みやすいよう、ふりがなをふり、文字の大きさを今までよりも大きくしております。

また、個人情報に関係する文言や個人名、言葉づかい、さらに当時の町の様子と現在の町の様子の違いなどを踏まえ、一部を再編集して掲載しております。



～「真鶴町郷土を知る会」により発行された機関紙『真鶴』～

郷土「真鶴」のわらべ唄（※一）

原文　佐々木　凡石

（出典：『真鶴』第五号）

忘れ去られていく子ども唄に愛着をもって以下つづってみました。

「大寒小寒
山から小僧がとんできた
なんといってないて来た
寒いといってないて来た」

寒い西空は、くちなし色の夕焼けです。

「烏　烏カンゼエモン
おめえの家が焼けたあゾ
早くいって水かけろ
おそくいって
はじかくな」

砂煙をあげた西風も海を白く波立たせる。ナライ（※二）も、ヒビの切れた手は痛い。

「風々吹くな
ドンドン水くれるゾ」

綿虫をマッチ箱にそっと取っては入れます。

「ヒョーバさんがれ
さんがり餅ちょくれるゾ」

西念寺の鐘が夕べを知らせます。舟が沖から帰ります。六地蔵の空地は日溜りです。ここは女の子の領域です。

「御輿どこ行く
かずさの山に
かずさ山から
峠を見れば

小さな子どもが
小石を拾って
紙につつんで
紺屋に投げた
紺屋の番頭様は
金かと思って
あけてみたらば
小石でござる

（中　略）

御池の花が開いた
御池の花がつぼんだ
ジャンケンポン」

おとっちゃんが小田原から買って来てくれたゴムマリはよくはずみます。

「一番初めは一の宮
二は日光の中禅寺
三は佐倉の宗五郎
四はまた信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つ村々鎮守
七つは成田の不動様
八つ八幡の八幡様
九つ高野の弘法様
十は東京の招魂社」

※一　わらべ唄　子どもたちが遊びながら歌う、昔から伝えられた歌

※二　ナライ　冬に山並みに沿って吹く風のこと。その地方によって風向きが異なる。真鶴は北東の風

「真鶴のわらべ唄」

原文　佐々木　凡石

（出典：『真鶴』第七号）

過去をふりかえってみますと、歴史という廻り舞台が大きく回転した時期が二度ほどあったように思われます。一つは、大正二年の関東大震災であり、もう一つは太平洋戦争の終局です。この二つの時期を経て、われわれの過去は急速に失われていったと思うのです。

それだけに、段々と忘れられていこうとしている古びた遊びや、ことばの端に、六十歳を過ぎた私たちは限りない懐かしさを感じます。そこには、私たちの子どもの頃の姿があります。またいまは亡くなった人々の思い出と重なって、その昔の夢と希望の日々がよみがえってくるのです。

ここに集録した「わらべ唄」は、真鶴の古老たちが子どもの頃、毎日、うたって遊んだものです。

真鶴だけにある独特のものかどうかはわかりません。他地方との関連については、専門家の研究を期待したいと思います。

「夕焼け小焼け

あした天気にナーレ」

恐らく子どもの頃に、この願いともつかぬ歌声を夕焼け空に呼びかけない人はなかったでしょう。烏が日金山に帰って行きます。死ぬと皆んな日金山に行くのだと、と聞かされて、それを信じていたものです。子どもらは、そんな烏の行方を眼で追いながら、三々五々と家路を急いだことでした

「帯になれ
たすきになれ」

大声で雁によびかけると空とぶ雁の列が帯になったり、たすきになったりしたものです。

想い出すその頃の空は、いつもくちなし色の空ばかりです。

真鶴の夕焼け空

「子どものけんかに
親が出て
人さま人さまきいてくれ
なかなかなおらぬ
楽屋さま」

その昔の話、真鶴小学校の椎の木の根もとが空洞になっていて、いつも六、七人の子どもが木枯らしをよけて遊んだり、話に熱中したりして時を過ごしていました。今のように、何でも手に入る時代とちがって、遊ぶ道具は自分で作ったり、虫をとったりして遊んだものでした。

「くもどん
くもどん
出ておいで
江戸が火事だから出ておいで」

「新島のわけえし
飛んで行け」

（中　略）

いたずらっこ児がまた歌っています。つつじの花の香りがかすかに漂っています。さわやかな五月晴れ、青葉の繁みにかくれたり、人の家の小屋にかくれたりしてかくれんじょをして遊びました。

「もんじ
もんじ」

木の上から、お猿さんのように下りてくる子どももいました。

遊びの最中に、ちょっと休ませてもらうには、

「てんま
てんま」

と、いわねばなりません。

百日紅の花の下で、筵をしいた盆釜によばれたこともありました。

「ああぶくたった
にーたった
にえたか　にえねか
たべてみろ」

女の子はおとなしく、おはじき、お手玉です。二個ずつおはじきが数えられます。

「ちゅう　ちゅう
たこかいな」
「蛤は虫のどく」
「つめつめのじゃもの
おおちゃくななひろ
おたねとたねと
たんたんえきほの
はたけなかの
つぼみを
てにとってみたらば
十六、十六
さむらいひょッけ」

男の子は大声で

「坊さま　坊さま
どこへ行く
私は田んぼの稲刈りに
私も一緒に連れりゃんせ
お前が行くと
じゃまになる

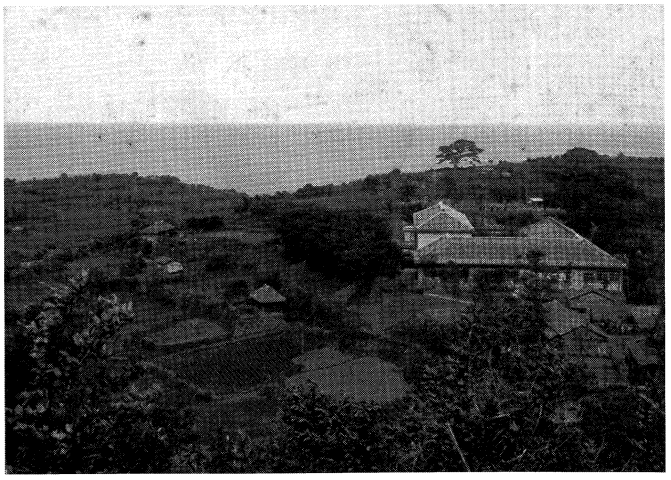
（中　略）

うしろの正面だーれ」

地織に着ぶくれて一列にならんだ子どもたちが

「いてえきやでーろ
いてえきやでーろ」

「芋虫しゃごろごろ」



旧真鶴小学校（大正時代）
真鶴町教育委員会

腹かけ、パッチで吉浜のブッキリ雨がやって来ます。

皆んな五厘もらいに家にかけ出してゆきました。

「いまねーた烏が

もう泣きやんだ」
「俺のせーじゃねーぞ
三年さきの烏のせーだ」

「一人来な
二人きな
みて来な

よってきな
いつ来た
むこどん
ななこの帯を
ハの字にしめて
ここの釜
いつかんしょ」

「かごめ　かごめ
籠の中の鳥は

いついつ出やる
夜明の晩に
鶴と亀とすべった
うしろの正面だーれ」

（中　略）

西念寺の六地蔵さまで、
よく遊びました。もう五十
年も前になりましょうか。

「開いた開いた
何んの花が開いた
れんげの花が開いた
ひらいたと思ったら
みるまにつぼんだ」

「一がさした
二がさした

三がさした
四がさした
五がさした
六がさした
七がさした
八がさした
くもんばち
ブンブンブン」

みんなみんな変わってゆきます。これが進歩というものでしょうか。

元西念寺の六地蔵
（現在は常泉寺に移転）

「古き真鶴の手まり唄」（※一）

原文　松本　米子
（出典：『真鶴』第五号）

わしらお母さん

「わしらァお母さんは名古屋でござァる
いけばよく来た　あがれ
とおしゃァる
あがれ茶々のめ、むすめ
のたばこ
たばこご無用なら裏へ出
てごろじ
菊やぼたんやおもとの花
や
おもとなぜ泣く腹でも痛

いか
腹が痛いきゃ　ハリ医者
呼ぼうか
医者もハリ医者もご無用
でござァる
せめてこの子が十にも
なァれば
寺にあずけて
学問さァせて
寺の縁から
つき落さァれて
（以下不詳）」

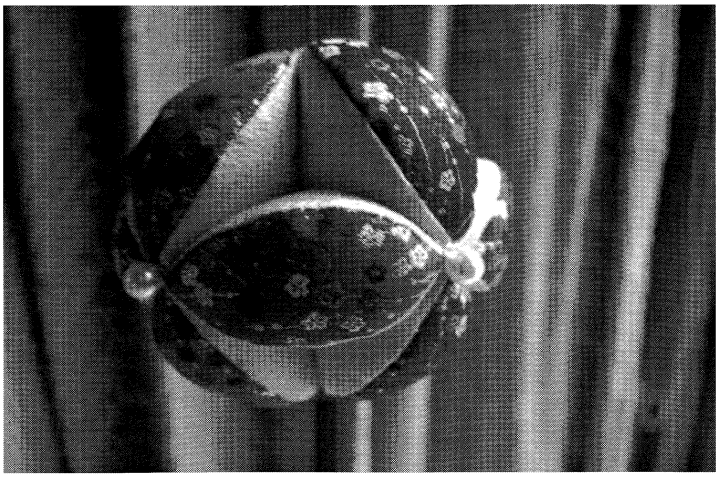
原木（※二）番頭さん

「原木番頭さんは（が）
大金持ちよ
庭で米つく
なかいでとおす
旦那横座で
そろばんはじく（き）
はじくはじめに
殿さんござる
奥の座敷で
髪の毛をならう
あまる髪の毛は
七尋八尋
馬につんで
十だ（駄）んあまる
牛につんでも
十だんあまる
江戸じゃ値がしる
問屋じゃうける
うける問屋で恥をかわす
恥をかわす」

※この唄は母ウメの記憶と、私の子どものころの思い出から綴ったものです。忘れたところもあるので、ご承知の方は訂正いただければ幸いです。

※一　手まり唄　子どもたちが手まりをつきながら歌った歌。遊び歌、わらべ唄の一種でもある。

※二　読みが「はらき」、「ばらき」と諸説あります。



手まり
民俗資料館のつるし雛

県内視察報告

平成二十九年三月年一日

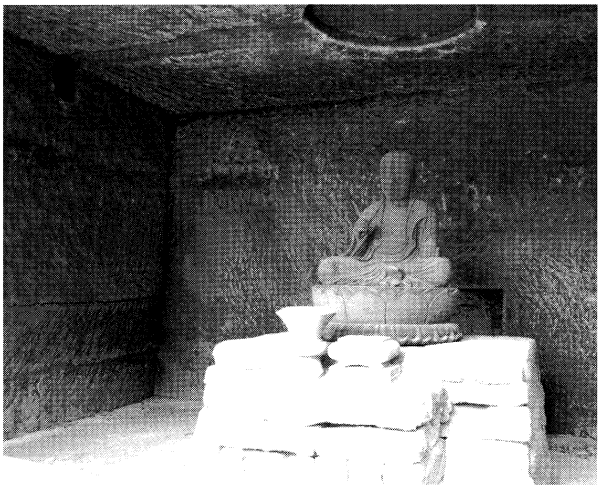
・浄光明寺（鎌倉市内）
・鶴岡八幡宮（鎌倉市内）
・遊行寺宝物館（鎌倉市内）

鎌倉市内にある浄光明寺にて、寺の敷地内にある大やぐらに鎮座する鎌倉時代に作られた地蔵菩薩坐像（網引き地蔵）を見学、当町岩地区の如来寺跡石仏群の保存・管理のために勉強してきました。

それ以外にも国の重要文化財に指定されている五輪塔（普賢塔）を始め、阿弥陀如来・両脇侍坐像などを特別に見学させていただきました。浄光明寺を見学したあとは、鶴岡八幡宮を見学、参道の両脇にある大石燈篭の礎石が、時代は不明ですが、真鶴より切り出された小松石であることを確認いたしました。

その後、藤沢市内にある遊行寺宝物館の展示を館長の案内で特別に見学させていただきました。遊行寺と歴代天皇や有名武将との歴史的かつ地域との関わりを知ることができ、大変に勉強になりました。

◀浄光明寺本堂にて



▶地蔵菩薩坐像（網引き地蔵）

「文化財だより」三十号の特集予定のお知らせ

次号の文化財だよりでは、真鶴の海女さんについて取り上げる予定です。

海女さんに関する資料等をお持ちの方、話をご存じの方は、真鶴町教育委員会生涯学習係までご連絡ください。

連絡
真鶴町教育委員会生涯学習係
六八－一一三一（内線四四一）

平成二十八年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業
- 文化財だより第二十九号発行
- 町民センター・民俗資料館展示事業
- 各施設での企画展示を実施

◎文化財審議委員調査研究事業
平成二十九年三月一日
鎌倉市及び藤沢市での視察研修を実施

浄光明寺にて